明治日本における社会ダーウィニズムと武士道

鵜　浦　　裕*

［要約］明治期の日本において、社会ダーウィニズムと武士道の流行の期間が重なる。そのためもあり、社会ダーウィニズムの洗礼を受けた明治の知識人には武士道をその文脈で解釈する記述を残す人が少なくない。社会ダーウィニズムとのすり合わせにより、加藤弘之など国家主義者は勇や忠に注目し武士道の戦闘的な側面を強調したが、他の知識人は反対に仁、義、礼、誠に注目し、武士道の仁徳の側面を強調した。この観点から代表的な記述をとりあげる。

社会ダーウィニズムは「人口増加→生存競争→適者生存→進歩」というプロセスで社会の変化をとらえる考え方である。日本では、一九世紀の第四四半期から二〇世紀初頭にかけて流行した。他方、武士道は日清・日露戦争前後に軍国主義を昂揚するためにブームとなった。このように両者は流行の時期が重なっているため、明治の知識人には立場を超えて、武士道を社会ダーウィニズムの文脈で解釈する傾向がみられる。本稿では、彼らの著作からこうした記述の代表的なものをいくつか拾い上げ、紹介したい。

たとえば官学の政治学者、加藤弘之（一八三六―一九一六）は武士道を国体の維持発展に不可欠の要素とみなし、次のように述べている。

> …余が見る所では吾が邦固有の実とも云ふべき祖先崇拝と武士道とは時勢の変化に拘はらず、更に益維持保存する必要あるのみならず尚進で其拡張発展を図らねばならぬことと考へる。吾が邦特殊の族父統治の国体なるものは最も此祖先崇拝と武士道の精神をもって維持することが出来る若しも此精神を失ったならば忽ち吾が国体は破壊されるであらうと余は確信するのである…［加藤、一九〇八：二八五］。

そもそも武士道は学問においても武芸においても、人より抜きん出ることを名誉とし、遅れをとることを恥とする。従って主君への奉公においても命を賭した忠誠競争が際限なく展開される。主君の恩に報いるため死を覚悟して奉公を全うすることが武士の生き方の一つであった。殉死によって、「君に対して忠、親には孝、武には勇」となる。つまり、忠誠競争の完璧な勝者となる。

武士道におけるこのような忠誠競争の側面を、加藤は利己性、自然淘汰など社会ダーウィニ

＊教授／アメリカ政治

ズムの基本概念を援用し、次のように「理論化」する。

加藤の理論化は、共同生活の発達により人間が利他性を獲得した経緯の説明から始まる。

> …凡ての有機体が唯一なる利己的根本動向を固有して居る通りに吾吾人間も矢早張此利己的根本動向を固有して居る…、けれども…共同的生存が発達するに随ては利他も発達する訳で共同的生存と利他と終始互に因となり又果となって発達するのである。
> さような訳であるから開明人民にあっては共同的生存の発達が十分である割合に利他も亦十分に発達せぬければならぬ筈である…［加藤、一九〇六：四五六―八］。

次に加藤は利他性を人為的に発達させる方法はないかと自問し、一見矛盾するようであるが、個人の目的を共同体の高尚な目的に一致させるように個人を誘導するという答えを出す。

> それには吾吾が固有する唯一の利己を十分意識せしめて以て此利己を高め尚優大なる手段に適用させるのである吾吾個人は国家たる大有機体を組成して居る細胞である、それゆへ此細胞たる吾吾個人の利益と其全体たる国家の利益とが融和合一するといふことを知らしめて、それで自己自身に利他行為をなすといふやうに導くのである…併し是れは決して方便でも何でもない全くの真理である…［加藤、一九〇六：四五六―八］。

要するに、加藤は個人の利己的な利害を国家の全体的な利害と一致させることができれば、たとえ利己的な動機で始められた行為であるとしても、結果としては利他的行為になるという。加藤自身の言葉を借りるならば、「畢竟する所全く明らかに吾吾の利己を利用して以て利他を釣り出す」のである。加藤はこれを「人為淘汰」の一つタイプとして「自力淘汰（Selpstselection）」説と名づけた。

加藤が奨励する「利己」から「利他」を釣り出す「自力淘汰」は、日本人が天皇に対する忠君愛国の行為を競い合い、殉国の節義を全うするプロセスを意味する。忠誠や殉死という武士道の価値観を「淘汰」によって自動的に高めることができれば、国体護持は万全であるという。加藤は次のように述べる。

> 吾吾個人に箇様な観念（= 利他心の自動的養成―鵜浦）が起って吾吾が相競って利他行為に励むやうになる吾吾が相競って負けず劣らずに忠孝仁義を励む忠君愛国に志すと云ふやうになるのを自力淘汰と名付けるのであって道徳の最上の進化は実に此自力淘汰に依るものであらうと思ふ若しも凡ての個人が各相競て此如き自力淘汰をするやうであったならば最早少しの心配もないのである…［加藤、一九〇六：四五九］。

社会ダーウィニズムの枠組みの中で武士道を精神的な熾烈な競争の結果つくられた産物であ

ると解釈するのは加藤だけではない。当時の知識人にある程度見られる解釈である。

たとえば黎明期の社会主義者の安倍磯雄（一八六五―一九四九）は『社会問題解決法』（一九〇一）の中で、高尚な精神的競争の格好の例として武士道をあげている。

> 若し衣食に対する競争を廃するの結果人類の活動を撲滅するに至るとせば、吾人は如何にして我国封建時代における武士の気風なるものを説明せんとするか、彼らは大名より定額の衣食を給せられたるものなるが故に、生存競争ということは殆ど与り知らざる所なりしなり。否彼らは衣食の事に心を労することを以て大なる恥辱と考えたりしなり。而も彼らは武芸を練ることに熱中し精神お修養を少しも怠らざりしなり。所謂武士道なるものは彼らが生存競争以外に在りて養ひ得し所のものにして衣食的競争の全廃がいかに精神的活動を刺激し得るものなるやを証するに足るべし…。されば生存競争を以て人生活動に於ける唯一の原因なるかの如く考えるは、蓋し人性を誤解せるの甚だしきものと言わざるべからず…［安部、一九〇一：一八七―八］。

また安部と同じく、幸徳秋水（一八七一―一九一一）は、物質的競争の廃止によって知識、芸術、道徳の精神的競争を奨励する手段として、社会主義を位置づける。歴史を振り返ると、気高い品性を備えた英雄や大事業を成し遂げた偉人はほとんど中産階級の出身である。なぜなら彼らの財産は、金持ちのそれのように堕落を許すほど多くないが、知性を磨き、互いに切磋琢磨するだけの余裕を与えるからである。もし武士が衣食のために競争すれば、すぐに「素町人根性」に堕落してしまうとさえいう。幸徳はそうした中産階級が生み出した精神的競争の例として、武士が生み出した武士道を挙げている。『社会主義神髄』（一九〇三）の中で、日本の武士道の栄光を次のように讃えている。

> …見よ封建の時に於る武士の一階級が其品性の尤も高尚に、気力の尤も旺盛に、道義の能く維持せられたる所以の者は、実に彼等が衣食のために其心を労するなくして、一に名誉、道徳、心理、技能のために勤勉競争するの余裕機会を有せしがために非ずや。若し彼等にして初めより衣食のたるに競争せざる可らざらん乎、直ちに当時の「素町人根性」に堕落し去らんのみ。豈に所謂「日本武士道」の栄光を擔ふことを得んや…［幸徳、一九〇三：五〇一―二］。

このように社会主義者は精神的領域における高尚な競争の例として武士道をあげている。安部や幸徳が言うように、「社会主義は、物質的競争を廃したうえで、精神鼎領域における名誉、知識、道徳の競争を奨励する」という主張は、当時、ほとんどの社会主義者が共通して唱えている。

確かに国家主義者も社会主義者も競争の目的を生存や経済から切り離し、道徳的領域や精神

的領域における競争として、武士道を位置づける点は同じである。しかし井上哲次郎（一八五六―一九四四）や加藤弘之は武士道から死をも恐れぬ戦闘精神をだけを取り出し、あくまで勝負にこだわり、武士道の他の道徳的価値に対しては消極的である。他方、安部や幸徳は物質的競争を廃し、精神的競争によって培われた道徳的魅力こそ武士道本来の価値であるという。その意味で、武士道は労働者を物質的競争から解放することで、知識、芸術、道徳の発達を促すことができるという社会主義体制の主張を証明するものとなっている。まさに「衣食足りて礼節を知る」というものである。

キリスト者の新渡戸稲造（一八六二―一九三三）もまた精神的領域における競争の産物として武士道をあげる。しかし黎明期の社会主義者のように、知能の競争だけに偏らない。新渡戸は人間が社会的存在であることを前提として競争を主張する。従って競争の領域は人を愛すること、弱者を助けること、そして義を為すこととなるのである。

最後の義の競争は、武士道を尊重した新渡戸を見るうえでことさら重要である。講演「世渡りの道」（一九一二年）の中で、次のように述べている。

> …武士は相見互いとは、古来武士の間に用いられた言葉であるが、人の苦を吾が憂とする武士の特徴を言明したものと思う。それ故に武士道の武士道たる所以は要するに同情にあると思う。維新以前にはこの武士道があって社会を維持した。優勝劣敗とか法律万能とかいうことは、一部の真理を含んでいるであろうが、之は単に消極的の働をなすのみで、真の社会の維持と進歩とは之のみでは得られぬ。更に同情という大要素がなければならぬ…［新渡戸、一九一二：三三〇］。

新渡戸の言う精神的領域の競争とは、道徳の競争であり、強いて言えば、信仰を競うことであると言えるかもしれない。新渡戸稲造は人を愛すること、弱者を助けること、そして義を為すことを武士道の本質とみなし、それを社会ダーウィニズムに「生存競争・適者生存」に対置させた。

以上のように、武士道を社会ダーウィニズムの文脈で理解するのは国家主義者の専売特許ではなく、黎明期の社会主義者やキリスト者もまたそうしようとした。いずれにせよ、加藤はじめ、当時の知識人による、社会ダーウィニズムの観点からの武士道解釈を総称して、サムライ・ダーウィニズムと名づけておきたい。

次に、これまで取り上げてきた明治の知識人は人種間や国家間の生存競争や、その一つとしての戦争についてどのような記述を残しているのかを確認していく。

武士道の戦闘的側面を強調した官学の政治学者、加藤弘之においては、世界を弱肉強食の修羅場と見なす社会ダーウィニズムの土俵にのせられる過程で、武士道は他の道徳的長所を削られていく。加藤は言う。国家間の競争に勝ち残るためには、たとえ国家が不義を冒しても、国民は武芸と忠孝の精神を以って、あくまでも国家に服従しなければならない、と［加藤、

一九〇九：一四三―五二］。この主張にはもはや武士道本来の姿はない。このように加藤の場合、社会ダーウィニズムと武士道精神との融合からは、結局、国体を維持するために盲目的な戦闘と忠誠の精神しか生まれなかった。武士道も社会ダーウィニズムも戦意高揚の道具でしかなかったのである。

他方、同じく社会ダーウィニズムの文脈で武士道を解釈した、黎明期の社会主義者は国家主義者の言う忠誠心や愛国心を否定した。また明治のキリスト教者は盲目的な忠君愛国に反対し反戦を唱えている。

まず人種間または国家間の生存競争により世界が進化するという考え方について、黎明期の社会主義者は多くを語らない。しかし強いてあげれば、幸徳秋水の帝国主義論がある。『廿世紀之怪物帝国主義』（一九〇一）の中の彼の説明によれば、帝国主義とは「所謂愛国心を経となして、所謂軍国主義を緯となして、以て織り成せる」領土拡張主義である［幸徳、一九〇一：一一七］。自由、正義、平等、博愛という文明的道義に価値を置く幸徳は、そのような帝国主義を肯定できない。そもそも当時の帝国主義の一部である軍国主義とは、功名心にこだわる軍人の好戦的愛国心と軍需から巨額の富を得ようとする資本家の欲望、加えて国民の虚栄心からできている。「大逆無動録」（『千代田毎夕』一九〇〇年一一月二四日～一二月一五日）の中で、幸徳は次のように説明する。

> …各国民は童男童女が五月人形、三月雛の美なるを誇り多きを競うが如く、其兵艦の多きを競いつつあり、夫れ唯だ相競うのみ、必ずしも敵国の来襲急なるを信ずるに非ざる也、必ずしも外征を急要とするに非ざるに似たり、事は児戯に類す…［幸徳、一九〇〇：二〇］。

また、『廿世紀之怪物帝国主義』（一九〇一）の中で、愛国心は迷信ないし動物的な好戦性でしかないともいう。

> …自家愛す可し、他人憎む可し、同郷人愛す可し、他郷人憎む可し、神国や中華や愛す可し、洋人や夷狄や憎む可し、愛す可き者のために憎む可きを討つ、是れ動物的天性にして所謂愛国心と名けらる…［幸徳、一九〇一：一四三］。

幸徳にとって愛国心とは、国を愛する心というより、戦場で発揚する敵への憎しみである。要するに利己的な動物本能として否定したのである。ちなみに井上哲次郎や加藤のような国家主義者にとって、愛国心こそ国家間の生存競争を勝ち抜くための最重要要素である。

他方、国家間の生存競争を勝ち抜くための集団主義的な国家体制は、天皇制国家イデオロギーとして、社会主義の前に立ちはだかった。当時の社会主義者にとって、天皇制国家イデオロギーは思想であると同時に、権力として存在したといってよい。例えば「社会主義と国体」（『六合

雑誌』、一九〇二年一一月）の中で幸徳は、「国体」という言葉が権力を後ろ盾としているため、いかに恐ろしく扱いにくいものであったかを述べている。

> 「国体に害が有る」の一語は実に怖ろしい言葉である。人でも主義でも議論でも、若し天下の多数に「アレは国体に害がある」と一たび断定せられたならば、其人、若くば其主義、若くば其議論は、全く息の根を止められたと同様である。少なくとも当分頭は上がらぬのである。故に卑劣な人間は、議論や理屈で間に合わぬ場合には、手ッ取り早く「国体に害ある」の一語で以て其敵を押し伏せ様と掛るのだ。そして［彼の］敵とする物の真相現実如何を知らぬ人々は、［此］「国体に害あり」説に雷同する者が多いので、此卑劣の手段は往々にして功を奏し、アタラ偉人を殺し、高尚な主義を滅し、金玉の各論を湮めて仕舞うことが有る…［幸徳、一九〇二：五三一―二］。

幸徳はむしろ開き直って、この教訓を実践するかのように、社会主義が「国体」に反するものではないとまで書いている。

> 社会主義の目的とする所は、社会人民の平和と幸福とに在る、此目的を達するがために社会の有害なる階級制度を打破して仕舞って、人民全体をして平等の地位を得せしむるのが釈社会主義の実行である。是が何で我国体と矛盾するであらう歟。有害なる階級制度の打破は決して社会主義の発明ではなくして、既に以前より行はれて居る、現に維新の革命に於て、四民平等てふことが宣言せられたのは、すなわち有害なる階級の打破ではない歟。そしてこの階級の打破は即ち我国体と矛盾どころか、却て能く一致吻合したものではないか…［幸徳、一九〇二：五三二―三］。

次にキリスト者による反論をみる。

まず人種間や国家間に適用される社会ダーウィニズムやその必然的な結果としての戦争への反応を見ておこう。

戦争について、たとえば内村鑑三（一八六一―一九三〇）は否定的に論評している。たとえば日清戦争の直前にの「初期の文章」の中で、「新文明を代表する小国と旧文明を代表する大国、自由と圧制、進取と退取」と書き、来るべき戦争を肯定したことがある［内村、一九三三：二二一―七］。しかし戦後には、その肯定を人生の「大失策」として撤回しているほどである。その理由は戦後の日本の行動にある。自国の利害ばかりを優先し、中国に対する「正義」を全く示そうとしなかったことである。内村にとって、その戦争は義戦でなければならなかった。内村は日清戦争を「東洋死滅のための戦争であった」と訂正した［内村、一九三三：七六一］。

内村にとって、正義のための以外に戦争する理由はない。しかも正義のための戦争は腕力で

勝つことを目的としない。一九〇〇年のエッセイの中で、次のように書いている。

> …余輩は正義は最終の勝利者であると確信して居る。然し正義が勝利を得るの方法は世人の期する処とは全く違ふて居る。正義は決して腕力に訴えて勝つ者ではない。正義は常に負けて勝つものである。是れ正義の正義として顕はれんためであって、若し正義以外の力を借りて勝つならば世に正義の実力を信ずる者は無きに至るであろう…［内村、一九三三：七六一］。

国家の生存と利害を最優先する加藤弘之などの国家主義者と正反対の立場にある。

内村に比べ、柏木義圓（一八六〇―一九三八）は人種間や国家間に適用される社会ダーウィニズムに反対する姿勢を明確にしている。

柏木義圓は「宇内統一」こそ神の意志であると同時に人類の悲願であると考えていた。それを達成するために、神は優勝劣敗と博愛伝道という二つの方法を用いているという。本来ならば、博愛伝道の手段が主流となるべきところを、欧米の先進国が軍事力を用いて優勝劣敗の方法を濫用しているという。「戦争と平和」（一八九年）の中で、彼は次のように述べている。

> …造化は此の統一を促す二個の方法を取れり。曰く優勝劣敗、曰く博愛伝道。慈父の其の子を育する、子にして自ら進んで学ばざれば必鉄鞭を以て之を強ゆ。優勝劣敗は造化の統一を促す鉄鞭なり。人類自ら統一の方向に進まず自暴自棄するに於ては、鉄鞭を以て之を強迫する亦止むことを得ざるなり。博愛伝道以て一統の時期を促さざれば、造化は必ず侵略を以て、戦争を以て、優勝劣敗自然淘汰を以て之を促す可し。優勝劣敗の鉄鞭を以て容赦なく蛮夷の絶滅せられ、未開国人の侵略せらるるは、人類博愛伝道の運動甚だ微弱にして未だ一統の事業を之に任ずるに足らざるを以て止むを得ず強迫の手段に出るなり。造化をして強迫の手段を取るの止むべからざらしむるものは、其の責任実に文明国民に在り。欧米大国が軍備の為めに費すの財は幾千億ぞ…［柏木、一八九四：七三五］。

柏木は社会ダーウィニズムを国家間や人種間に適用する考え方は世界戦の原因の一つとして危険視した。それに代わる思想として社会主義を提唱した。「世界の二大思想」（一九二四）の中で、彼は次のように書いている。

> …吾人は、社会主義の思想其物を以て危険思想と為すは頭脳の何かして居る者だと思うふ。反って、生存競争優勝劣敗の原則を生産界に応用して自由競争を金科玉条とする資本主義の思想と、此原則を国際間に応用したる帝国主義の思想こそ大なる危険思想ではないか。彼の欧州大戦を惹き起したるものは此思想ではないか。天下何者か之れ以上の

危険があらう。之に引き換え相互扶助の原理に基き共働共存を原則とする社会主義は、反って穏健の筈である…［柏木、一九二四：二一―二］。

新渡戸稲造は社会ダーウィニズムの人種間への適用について、「逆淘汰」となることを理由に、戦争など残酷な殺し合いによるものを否定する 。しかし経済競争など非暴力的な形式については、否定しない。「農業本論」（一八九八）の中で、次のように述べている。

…余輩は固より或る意味に於ける帝国主義、即ち暴力を逞うして弱肉強食の醜を演ずるが如き残忍酷烈なる主義は、決して之を望む者にあらずと雖も、苟も国力の伸長にして経済発達の結果として起る以上は、その膨張咎むべき所毫もなきのみならず、却りて人類進歩の一端として、寧ろ嘉すべきものあるを見るなり…［新渡戸、一八九八：五三八―九］。

他方、浮田和民（一八五九―一九四五）は、世界を人種間、国家間の生存競争の場とみなし、そこに適者生存の原理が働くことによって、世界の文明は発達してきた考えていた。過去は言うまでもなく、領土を拡大する帝国主義的な侵略もまた、社会進化の原動力として、国家による不可欠の活動だと考えていた。確かに過去においては軍に力による侵略の側面が強かったが、「現今」においてはむしろ経済活動による「自然的膨張」の側面が強くなっている指摘する 。しかし実際には依然として軍事的な侵略の活動が残っているという。まさに典型的な社会ダーウィニストである。「帝国主義の教育」（一九〇一）の中で、次のように述べている。

…現今の帝国主義が実際に於ては往々侵略的となるは、是れ民族的生存競争の自然的結果なり。是れ世界に半開野蛮の民族存し、將た国家として独立するの価値無き国家在る限り、消滅すべからざるの現象なる。然れども其結果は即ち世界人類の文明を開発するの傾向あり。故に之を悲歎するが如きは、所謂婦人の仁にして取るに足らざるなり…［浮田、一九〇一：三五九］。

このように浮田は侵略であれ経済競争であれ、あくまでも人種間、国家間の競争を前提とし、そのプロセスが続くことに価値をおく。逆に人種や国家が切磋琢磨する機会を失うことは正しくないという。従って、生存競争が「宇内統一」の国家に収束するという柏木のような歴史観とは相いれない。それは社会進化の停止を意味するからである。

それでは次に、明治のキリスト教徒の愛国心に関する見解をみる。井上哲次郎や加藤弘之など国家主義者と呼ばれる思想家は、国家間の関係を生存競争とみなす社会ダーウィニスト的な世界観に立つ。それを勝ち抜くためには、国家の利害を最優先させ、国民を国家に服従させるための愛国心の必要性を説く。逆に言えば、個人の国家への服従を社会ダーウィニズムによっ

て正当化したと言ってもよい。それに対して、明治のキリスト教徒がどのように反応したかをみておこう。

このような利己主義的な国家主義や愛国心を、内村鑑三や柏木義圓は頭から否定した。たとえば内村は、国家主義者から「愛国心の欠如」を誹謗されながらも、個人間の共同一致は国家間にもあてはまると主張し、利己的な愛国心を否定した。全集所収の「初期の文章」の中で、内村は次のように述べている。

> …自利を以て社会の中心と認るの人は人類中最も小にして最も賤しきものなるが如く、自国を以て万国の中華と見做すものは亦最も弱く最も進歩せざるものなり。自国の強大のみを求めて他国の利益を返りみざりし国民が永久の不況に達せし事あるは余輩歴史上未だかって之を認めざるなり。而して若し我日本国も其希望する処の強大に達せんと欲せば此動かす可らざる天理に従はざるを得ず…［内村、一九三三：一六五］。

内村にとって、世界の中で日本が果たすべき理想の役割は欧米敵国主義ではない。むしろ欧米の新文明を吸収し、改良を加えたうえで、アジアに紹介し、アジアの発展に貢献する。いわば「東西両洋の仲裁人」だったのである。

柏木義圓は国家主義者による「不義戦」の正当化を一笑に付す。井上哲次郎や加藤弘之によれば、不義戦といえども、国家のためであれば、国民は戦うしかないという。国家主義者の主張は国民に仁義を説き、国家に不義を認める矛盾をおかしていると批判する。「加藤文学博士に答ふ」という小論の中で、彼は次のように加藤を批判する。

> …笑うべきは所謂国家主義者流なる。彼等は個人に対しては仁義道徳を唱えながら反って…博愛仁義の道の国家に危険ならんを恐るるは実に卑怯千万と謂わざるを得ず。是畢竟彼等が未だ道徳の勢力を解せざるに由るなり。一時を経営する近眼なる政治家に此見ある尚ほ恕す可し。万世の真理を目的とする学者説くに学生の徳器を成さしむべき教育家にして此誤想に雷同して個人の為めに仁義を排するが如き自家撞着あるに至りては実に奇怪千万と謂わざるを得ざるなり…［柏木、一九〇一：九三］。

このように柏木にとって、国家を絶対化する加藤の思想は封建時代の「専制主義」でしかない 。「勅語と基督教」（『同志社文学』、一八九二年一一月～一二月）と題する論説のなかで、同じように井上哲次郎を批判している［柏木、一八九二］。背景には、井上が『教育勅語』（一八九〇）の忠君愛国の精神に反するとしてキリスト教を批判していたこともある。

確かに柏木は国家間の関係についても社会ダーウィニズム的な見方を否定している。国民に従属を迫る国家主義を否定し、また自由競争に代えて広い意味での社会主義を提唱していた。そして、その理想を実現するために彼が唱えた方法は、家族内の助け合いである。「社会の理

想―一国一家族」（一九三四）と題する小論の中で、柏木は次のように述べている。

> …如何にして人類をして生存競争の域を脱せしむべきか、曰く他なし、人類をして一家族たらしむるにあるのみ、之を為す如何。
> 力に応じて働き、必要に応じて供給する。一家族内に在りては、力ある者が其力に応じて能く働いても、決して我れのみ多く働いて損だなぞとは言はない。而して一家中老幼婦女病弱者など力の無い者は、他の屈強の者と同様の働きが出来ないでも、亦之が為に痛く気の毒な思も致さぬのみか、病者や老幼者は反ってよく衣食を供給されても誰れもが之が為に不平を洩らす者とては無い。特に最も損な役割なる台所の仕事を一生涯為す婦人達も之を不平とかこたない、これが即ち家族の生活である…［柏木、一九三四：三九八―九］。

相互扶助の原則に立つ説明と思われる。しかし今日の感覚では受け容れられない説明である。

同じ明治のキリスト者であっても、柏木義圓とは対照的に、浮田和民は井上哲次郎や加藤弘之に近く、国家を第一義的な存在として受け容れる。国家の理想像とは、政治的独立を維持し、産業、芸術、学問、宗教などにおいて各国と健全な競争を展開し、それによって人類の発展に貢献することであると、「帝国主義の教育」と題するエッセイの中で述べている［浮田、一九〇一：三六一］。

浮田によると、国家がこの理想を実現するために、国民のあらゆる活動を方向づける必要がある。産業であれ、教育であり、道徳宗教であれ、国家の生存に無益または有害なものはすべて廃止しなければならない。例えば「世界的生存競争に適合すべき人民を養成する」という遠大な方針が、教育の基本であるという。また道徳については、「国民教育論」（一九〇三）と題するエッセイの中で次のように述べている。

> …吾人は生存の義務を以て、倫理の大本となすものなり。故に道義法の第一原則は唯だ生存せよと言うこと是なり。第二に原則は、生存のために競争せよと云うにあり。第三の原則は、更に高尚なる生存のために競争せよと云うにあり…［浮田、一九〇三：三七二―三］。

国民の義務として「生存」を筆頭にかかげる理由は次の通りである。

> …国家は飽くまで自己の生存及び活動を以て、其の目的と為さざる可からず。個人は一代なれども、国家は永代不滅なり。少なくとも不滅を以て其の理想となすものなり。されば国家の一要素たる個人も、亦た極めて生存の義務を重んじ、且つ飽くまで生存のために、競争するの勇気を養はざる可からず。今後の日本が最も要する所の武勇は討死に

武勇に非ずして生存の勇気なり。困難に処して能く忍耐し、逆境にありて能く生存するの武勇なり…［浮田、一九〇三：三七二］。

加藤弘之はむしろ討ち死にをすすめる。それが「不義戦」のためであれば、まさに犬死に近い。浮田は、「不義戦」を肯定する加藤を批判しているのである。しかし浮田にとって、国民の生存は国家生存のためであって、そのためには自死の自由さえ許されないという。彼の国家第一主義は、加藤とは異なる、国家主義の側面を表しているかもしれない。

次に、明治のキリスト教知識人は、人種主義と融合した社会ダーウィニズムに対してどのように反応していたのだろうか。

新渡戸稲造は植民政策論を専門の一つとしていた。彼によれば、植民地は人間社会の中で生存競争の最も厳しい「場」であるという。彼はその「人種闘争の場」について、「植民政策講義及論文集」の中で次のように説明する。

…人類界に於て自然淘汰の忌憚なく行はるる所は植民地也とす。通常新開地を失敗家の趨く処蹉跌者の逃場所となし劣等人種の群居集落と信ずる者あれども事実は大に之に反す。何となれば、一般社会に於て単に弱者たるが故に失敗せる者は、一敗地に塗れては復た起つ能はず。新開地に赴き気力等元よりなく、奮て植民地に進む者は仮令失敗者にせよ元気猶ほ旺盛なる者に限ればなり。彼等の赴く先きは生存競争の潮流極めて急激にして弱者を容るる余地なく旧社会に於ては中位に位せる者も新開地に至れば激烈なる競争に耐うる能はずして半途に斃れざる者稀なり。濠州或は米国に「アングロサクソン」人が思ふ存分発展するは之が為なり…［新渡戸、一九四三：三六〇］。

さらに新渡戸は白人優位の人種主義を条件つきで受け容れている。小論（一九一六）の中に次のような一節が見つかる。

…我輩は便宜上、色、言語等より人種を区別し得るものと思ふ。即ち人種を認めるものである。人種の区別を認むる極端の論者は、たとえばヨーロッパ人と黒人とはその祖先を異にするという人種多元論…を取り…、而して人種は祖先を異にするから、優劣があると論ずるのである。我輩の見る所によれば、、人種間の優劣の理由を説明することは出来ないが、優劣の存することは事実である…［新渡戸、一九四三：三六〇］。

ただし新渡戸にとって、優劣の基準は「団体としての能力」即ち「国家的機関の具備」に求められるべきであって、個人の才能や能力に求められるべきではないという［新渡戸、一九三四：一三九］。

内村鑑三もまた新渡戸と同じように、白人優位の進取主義を認めているかのようである。白

人以外の人種を「ツラン人種」と呼び、それは白人より劣っているという。「興国史談」（一九〇〇）と題する小論の中で、次のように述べている。

> …ツラン人種は歴史的最下層の民である。彼等は白色人種の文明に物質的基礎を供した者である。彼らは僅に事物の利を見る事ができる丈けであって、其理を透察するの力の欠乏して居った。故に彼等の文明なるものは農工業の初歩、音字の発見位に止まり、科学だとか、思想だとか、権利だとか、自由だとか云ふ純真理の領分に属するものには及ばなかった。其政治は圧政と定まって居った。其文学は文芸で、其美術は装飾の一種たるに過ぎなかった。ツラン時代は人類の小児期であって、其肉体的発育の時代であった。白色人種の出現を以て人類は進歩の新紀元に入ったのである…［内村、一九三二：七七三―四］。

こうした人類史学的な意味における受容とは別に、内村は国家主義者による天皇制の礼賛をけん制する意味で、敢えて白人を優意図する人種主義を利用している。「自由の多寡」を基準として、当時の日本は劣等人種の住む国だという。自由という西欧の価値観を尺度として、日本人を劣等人種と位置づけることで、当時の日本を批判した。これもまた「劣者としての受容」の一つである。同じく「興国史談」の中で、次のように述べている。

> …人類の歴史は実に其自由史であって、進歩とは実は自由の発達より外のものではない。最も自由なる国民が最も進歩したる国民であって、自由を愛すること最も厚き人種が最も優れたる人種である。人類にあっては優勝劣敗は自由の多寡を以て決せられる問題である。西洋人が東洋人に優るのも、同じ西洋人中で仏蘭西人が露西亜人に優るのも、英吉利人が仏蘭西人に優るのも、亜米利加人が英吉利人に優るのも、皆其自由の多少に由るのである…。
>
> 歴史的人種の中で自由の観念に最も欠乏して居るものはツラン人種即ち黄色人種である。彼等は王者あるを知って自己あるを知らない。彼等は服従するを知って自律するを知らない。忠孝とは彼等の唯一の道徳であって、彼等は長者に頼るにあらざれば、人々相信任して社会を組織するの途を知らない…［内村、一九〇〇：七八七―八］。

以上のように、明治のキリスト者の社会ダーウィニズムへの反応は、一概には論じられないことがわかる。国内の個人間の関係への適用について、内村鑑三や柏木義圓は競争を否定した。特に、内村にとっては、競争の否定はキリスト教に入信した理由の一つでもある 。他方、浮田和民は井上哲次郎や加藤弘之に近く、国家間の関係を生存競争の場とみなし、国内の統一を主張している。

また新渡戸稲造は条件つきで国内の個人間の関係への適用を肯定し、国家間の関係を生存競

争の場とみなしていた。ちなみに、大学時代にスペンサーの進化論に心酔した新渡戸は、アメリカ留学時代にその夢からさめたという。しかし「人生読本」（一九三四）によると、晩年には再びスペンサーに回帰したともいう［新渡戸、一九三四: 三六七］。彼の著作には社会ダーウィニズムの影響が比較的強くみられる。

引用文献

安倍磯雄
一九〇一、「社会問題解決法」、嘉治隆一編『明治文化資料叢書 第五巻 社会主義編』、風間書房、一九七二、四三―二〇〇
浮田和民
一九〇一、「帝国主義の教育」、武田清子編『明治文学全集 八八 明治宗教文学集（二）』、筑摩書房、三五九―六七
内村鑑三
一九〇〇、「興国史談」、『内村鑑三全集 第一巻 初期の著作 上』、岩波書店、一九三二
一九〇〇、「東京独立雑誌時代」、『内村鑑三全集 第二巻 初期の著作 下』、岩波書店、一九三三
一九三三、『内村鑑三全集 第二巻 初期の著作 下』、岩波書店
柏木義圓
一八九二、「勅語と基督教」、武田清子編『明治文学全集 八八 明治宗教文学（二）』、筑摩書房、一九七五、七四―八〇
一八九四、「戦争と平和」、伊谷隆一編『柏木義圓集 第一巻』、未来社、一九七〇
一九〇一、「加藤文学博士に答ふ―所謂国家主義の妄謬を排す」、武田清子編『明治文学全集 八八明治宗教文学（二）』、筑摩書房、一九七五、八九―九四
一九二四、「世界の二大思想」、伊谷隆一編『柏木義圓集 第二巻』、未来社、一九七二
一九三四、「社会の理想―一国一家族」、伊谷隆一編『柏木義圓集 第二巻』、未来社、一九七二
加藤弘之
一九〇六、『自然界の矛盾と進化』、金港堂
一九〇八、『瞑想的宇宙観』、丙午出版社
一九〇九、『キリスト教徒 窮す』、同文館
幸徳秋水
一九〇〇、「大逆無動録」、幸徳秋水全集編集委員会編『幸徳秋水全集 第三巻』、明治文献、一九六八
一九〇一、『廿世紀之怪物帝国主義』、幸徳秋水全集編集委員会編『幸徳秋水全集 第三巻』、明治文献、一九六八
一九〇二、「社会主義と国体」、幸徳秋水全集編集委員会編『幸徳秋水全集 第三巻』、明治文献、一九六八
一九〇三、『社会主義神髄』、幸徳秋水全集編集委員会編『幸徳秋水全集 第四巻』、明治文献、一九七八
新渡戸稲造
一八九八、「農業本論」、新渡戸稲造全集編集委員会、『新渡戸稲造全集 第二巻』、教文館、一九六九
一九一二、講演「世渡りの道」、新渡戸稲造全集編集委員会、『新渡戸稲造全集 第八巻』、教文館、一九七〇
一九三四、「人生読本」、新渡戸稲造全集編集委員会、『新渡戸稲造全集 第十巻』、教文館、一九六九
一九四三、「植民政策講義及論文集」、新渡戸稲造全集編集委員会、『新渡戸稲造全集 第四巻』、教文館、一九六九

（2018.9.28 受稿 , 2018.11.1 受理）